

〈書 評〉

アンヘル・エステバン／ステファニー・パニチュリ
『絆と権力—ガルシア＝マルケスとカストロ—』

(野谷文昭訳 新潮社 2010年 383頁)

片 倉 充 造

原題に『ガボとフィデル—ある友情の風景— (*Gabo y Fidel: El paisaje de una amistad*)』とある。これは1982年度ノーベル文学賞に輝いたコロンビアのガブリエル・ガルシア＝マルケス(1928～)と、キューバ革命を指導・成功(1959～)させ、米国フロリダ半島の至近距離で社会主義国家の運営に当たるフィデル・カストロ(1926～)との心情に満ちた交友録であり、絆と権力という副題は、その交誼のこのうえなく的確な、詩的な読み替えであると言えるだろう。同書の帯には、〈文学者〉と〈革命家〉とが並列されているが、叙述内容は並立というよりも、キューバやカストロとの親交に留意したコロンビア人作家の評伝と見てよいだろう。

著者のアンヘル・エステバンは、ホセ・マルティやキューバ文学研究で多くの業績を残すグラナダ大学教授であり、類証にはグルメで都会的な名探偵カルバリオで有名なカタルニアの作家・ジャーナリスト、マヌエル・バスケス・モンタルパンによる資料もよく活用している。そのうえ共著者のステファニー・パニチュリも、マルケスやキューバ革命を起点にキューバ文学を専攻する研究者であり、訳者もまた日本でよく知られたラテンアメリカ文学者であることから、本書の重心が〈文学〉にあることは自ずと読み取れる。

3部16章、補遺、参考文献に訳者解説が施された構成にしておよそ400頁の労作には、文学人と権力者との言い尽くせない微妙な心思の濃淡が反映されている。

それでは個別に主な事項を講評してみよう。「第1部 友情の始まり」(13-76頁)の「1 まだ神々が遊んでいたころ」で神々とあるのは、もちろんラテンアメリカの“超人的存在”マルケスとカストロのことを指しているのであり、日本語でもよく若者にとってのカミと表現されたりする、カリスマ性を帯びた絶対者もしくはそれ以上の存在ということになろう。奇しくも、ともにスペイン・ガリシア地方の系統とされる“神々”が相互にそれぞれ引き寄せられたのは、1948年4月9日暴動のボゴタでのことであった。コロンビア自由派の指導者ガイタンへの応援で首都に入っていたフィデルと、当時ボゴタ大学法学部生として在住したマルケスとの意外な組み合わせ。「ガイタン暗殺」が引き金となって発生した「ボゴタ騒動」の混乱で、マルケスは自作原稿やタイプライターへのこだわりを見せた。この周辺のどこか芝居がかった言い回しは、もうすでに、“マルケスの語り世界”への引き込みを思わせるようだが、評者はやはり、メキシコ革命小説の原点、マリアノ・アスエラ『虐げられし人々』(*Los de abajo*, 1916, 高見英一訳, 学藝書林, 1970)の主要登場人物で数少ない知識人のルイス・セルバンテスをめぐる、タイプライター破壊の一齣に思いを巡らせるところである。まさしくタイプライターは、〈知〉の象徴なのであろう。

1959年1月マルケスとアプレヨ＝メンドーサ(マルケスについての伝記作家)がキューバに赴き、司令官カストロと面談を交わしたことが記録されている。キューバ革命勃発後、北米の情報機関に依存しないラテンアメリカ独自のニュース報道機関を目指して『ブレンサ・ラティーナ』が創設され、マルケスはそのハバナ・オフィスに移動するが、この時にもガボとフィデルは再会

する。ワルシャワ機構軍がチェコスロバキアに侵攻した1968年、キューバでは「パディリヤ事件」が始まった。ソビエト連邦が強固なエゴイズムを露にしたように、キューバの文学界では「フリアン・デル・カサル詩賞」を受賞したエベルト・パディリヤは詩人としての奔放な発言により、“嘘つきで不誠実”とみなされ、1971年には逮捕されるにまで発展する。しかしながらこの事件は、カリブの一島国の中での事象として見過ごされたのではなく、これを機会に無数の作家・知識人たちが（バルガス＝リョサ、フアン・ゴイティソロ、カルロス・フエンテス、アプレヨ＝メンドーサ、オクタビオ・パス、ジャン＝ポール＝サルトルなど）が、カストロの思想から離反することになった。

フィデル・カストロへのそうした最初の書簡では、「ここに署名した者たちは、キューバ革命の主義とその目指すところに連帯するものであるが、貴殿に対し、著名なる詩人にして作家のエベルト・パディリヤの逮捕について憂慮していることをお伝えし、前述の逮捕が引き起こす状況についてご勘案いただくために、本書状をしたためるものであります。」(49-50頁)という文面で革命指導者の認識が質されている。ここには上記のリョサ、フエンテス、パス、サルトル他高名な識者が連署しているものの、マルケスの名前はどこにも見当たらない。当時のガボの“雲隠れ”について、「応えるには時期尚早だったのだ。」(50頁)と著者はその思慮を綴っている。マルケスにしてみれば、到底簡単には答えることのできない、まさしく黙考して態度を保留するしか他なかったのであろう。

既述のソ連軍のチェコスロバキア侵攻以後のマルケスが指向する行動の支柱は、カストロとのさらなる連帯の選択であるとともに、ラテンアメリカ〈文学ブーム〉の中心人物としての行動の継続であった旨、著者は要約している(69頁)。

「第2部権力と栄光」(77-240頁)は、最も読者の関心を引き覚ます中枢部分であろう。読み手にとって一種の壮快感をもたらしてくれるのは、「5 死者と花に彩られたこの老いた政權：秋の族長」の冒頭、「ガルシア＝マルケスの人生のうちで最も興味深い時期のひとつは、間違いなく、1975年の『族長の秋』の刊行から1982年ノーベル文学賞受賞までの期間である。この時期にフィデル・カストロ、および程度は劣るが、ヨーロッパとアメリカ大陸の大統領たちとの親交が深まる。」(94頁)に明らかなように、良質の著作を発表し、作家として社会的上昇を続けるマルケスが、「ノーベル文学賞」という極点に到達する力感漲る時期であり、それが世界的な権力や権威と呼応し始める時機でもあるからだろう。“権力の厨房にいるのが好きな男”(81頁)とも形容されるコロンビア人作家にとって、その性向を満足させる環境が〈現実〉化していく成熟期にあり、言わば権力に寄り添うことを好みとするマルケスには、それは至福の時代であったに違いない。元コロンビア大統領ベリサリオ・ベタンクールは、「彼は権力の傍にいることを好むが、それを自分のものにするためではない」(173頁)と洞察している。『百年の孤独』に代表される中心人物アウレリアノ・ブエンディア大佐は、こうしていつのまにかどことなく、フィデル・カストロ国家評議会議長に血肉化していく。

マルケスの権力指向もさることながら、インタビューでの文言を拾っていくと面白い特徴にたどり着く。「プレイボーイ誌：あなたは『族長の秋』の第1稿を、『百年の孤独』の二番煎じみたいだという理由で破棄してしまったと言われていますが、本当でしょうか？—GM：部分的には本当だ。その小説は3回書こうとした。(略)けれど書き始めるとすぐに、そのアイデアを完全に捨ててしまった。リアルじゃなかったからだ。」(104-105頁)

本当でしょうか？と訊かれて正否で即答するのではなく、“部分的には本当”とする返答は、『ド

ン・キホーテ』[後編]〈25〉章でのペドロ親方の占い猿による口演と同様であるし、叙述のリアリティへの関心は、セルバンテス文学の真骨頂でもある。

チリの合法的社会主義アジェンデ政権を武力で破壊したピノチェトの軍事クーデター（1973）に際し、マルケスは〈文学人〉であることだけではなく、さらに力強く政治参加することを決心したと吐露している。「チリの軍事クーデター以来、多分良心の問題のせいで、はるかに活動的で、戦闘的になった（…）。するとそのとき、率直に言うと、これまでの人生で初めて、政治において自分がしなければならないことは、文学でできることよりも大事なのだと思い始めたのだ」（98頁）。

権力者や権勢に惹かれるマルケスには、アステカのモクテスマ皇帝、マヌエル・デ＝ロサス大統領（アルゼンチン）はもとより、デュヴァリエ大統領（ハイチ）、サンタ・アナ大統領（メキシコ）、ソモサ＝ガルシア大統領（ニカラグア）、エルナンデス＝マルティネス大統領（エルサルバドル）そしてトルヒーリョ大統領（ドミニカ）、バティスタ大統領（キューバ）、ポルフィリオ・ディアス大統領（メキシコ）、エストラダ＝カブレラ大統領（グアテマラ）、オスカル・ベナビデス大統領（ペルー）、トリホス将軍（パナマ）他は、魅力に満ちたモデルの一覧である。権力者の孤独を主題とした『族長の秋』を書き上げることは、「全体として見れば、我々ラテンアメリカやカリブの作家たちは、現実そのものが我々に勝る作家であることを、正直に認めなければならない。」（109頁）という発言の通り、〈魔術的リアリズム〉を醸成する中南米地域の風土を再認識する場でもあった。

ラテンアメリカ・カリブ地域の数多の権力者の特徴を様々にコラージュして創り上げたはず（マルケス対談集、「想像力のダイナミズム」、大熊栄訳、『すばる』1981、4月号所収、参照）の族長像ではあるが、〈文学者〉と〈革命家〉の両雄をよく知るアブレヨ＝メンドーサの評言のとおり、〈独裁小説〉の主人公をカストロが意識し、さらには敬遠せざるをえないほど似ているとすれば、それは〈文学者〉が“カリブの女王”（＝キューバ）の権力の中枢に位置していることの反映とも言えるだろう。権力を獲得し行使し維持する〈革命家〉、その権力（者）に憧れ寄り添い助力する〈文学者〉、両者の紐帯、アイデンティティは、政治権力そのものであろう。加えて、「フランコは、文学だったらありえない死を遂げたんだ。（…）『族長の秋』の構想を練り始めたとき、先ず初めに気づいたのは、フランコ政権のような独裁政権の下でスペイン人が経験したことを無駄にしたいくないということだった。」（110頁）というガボの述懐は、支配－被支配の緊張関係を検証するうえで普遍的な意義を持つ。

「第3部キューバから天へ：神、ハバナに入る」（241－334頁）の「13 そして夢は…それは映画だ：サン・アントニオ・デ・ロス・バニョス」についても、評者が以前訪問した経験上、言及しておきたい。マルケスと映画製作については、人物史の一時期、コロンビアの「エスペクトドル紙」による派遣で、ネオリアリズム優勢の在ローマ映画実験センターの監督コースに所属（1954）したことが、そもそもの出発点と見られる。ラテンアメリカ史の寓話とも言える1972年刊行の『エレンディラ』（鼓直・木村榮一訳、1988）は、もとより映画作品の脚本として手懸けられたものであり、マルケスのシナリオがリュイ・グエラ監督（仏・墨・西独合作1983）のもと発表された。そして1990年10月《新ラテンアメリカ映画祭'90》というプロジェクトが、マルケスの来日とともに実現された。伝統的な秩序と新しい価値観のせめぎあいを共同体の人間模様に映し出した1981年の『予告された殺人の記録』（野谷文昭訳、1984）もまた、ネオリアリズムゆかりのフ

ランチェスコ・ロージ監督により映画化されている。

こうしたマルケス作品のみならず、ラテンアメリカ全域を対象として巻き込んだ映画運動の展開には、1986年12月4日新ラテンアメリカ映画財団（Fundación del Nuevo Cine Latinoamericano）の創設が関わっている。ハバナ郊外の同地には、「国際映画テレビ学校（Escuela Internacional del Cine y Televisión）も創設され、専門的な映画・テレビ業界人の育成を目的とし、斯界に有能な人材を輩出している。東京で行われた上映挨拶でのエスピノサ文化副大臣による「この映画祭では、米国が配給するような娯楽に偏ったものではなく、観客が社会全体を再考するような映画作品を提供します。」との硬質のスピーチは、現今でも斬新に思われる。（20年を経てもなお斬新なままでは問題なのかも知れないが…）財団・学校の維持、運営には、スペイン、フェリペ・ゴンサレス政府の協力（奨学金提供、教員派遣、設備の寄贈等）も進められたが、その合意取り付けの影には、マルケスの外交官的役割が機能していたと聞けば頼もしい。

終盤の「補遺：もう歌わない白鳥の末期」（335-343頁）では、2003年に亡命未遂者たちを極刑で処罰したカストロ議長や親しいガボの態度を、旧知のリョサをはじめ左翼思想に理解があった文化人たちの多くが真っ向から批判する。さらにリョサはマルケスのことを「フィデル・カストロの廷臣であり、独裁政権は彼を知的分野におけるアリバイとして見せている。」（342頁）とまで両雄を糾弾する。

死刑反対論者でありながらカストロ政府による処刑を黙認する結果となってしまったマルケスには、死刑反対論者であるとともにキューバ独自の社会主義社会建設になお開かれた可能性を見出そうとする苦渋が透視できるだろう。訳者の別稿『マジカル・ラテン・ミステリー・ツアー』五柳書院、2003、第3章末）には、〈ゲバラ＝ドン・キホーテそしてサンチョ〉や〈ゲバラ＝ドン・キホーテ／カストロ＝サンチョ〉との論考も見られるが、ラテンアメリカの問題をラテンアメリカが主体的に解決する、シモン・ボリバルやホセ・マルティが指向した〈ラテンアメリカの解放〉を継承して共通の目標とする〈革命家〉と〈文学者〉との関係性は、理想社会の建設を夢見て似たもの同士が巻末まで苦楽をともにした〈騎士ドン・キホーテ〉と〈従士サンチョ〉のそれ（「まったく同じ鋳型から生まれ出たとしか思えない」〔後編〕〈2〉章参照）とおおよそ相似している、と評者なら整理したい。

『越境するラテンアメリカ』（パルコ出版、1989）、『ラテンにキスせよ』（自由国民社、1994）そして『マジカル・ラテン・ミステリー・ツアー』（前掲）など〈文学〉を通してラテンアメリカ社会・文化を解読し続けるこれほどの著・訳者であれば、『キューバ文学史』、『キューバ文学研究』もしくは『キューバ文学講義』を表題とする文学書の発行が待望されることだろう。

* 付記：訳者はこのほど7月24日、第13回「会田由翻訳賞」（日本スペイン協会主催）を受賞した。